

「作品が出来るたびに うちに持っていらっしゃいよ」

突然現れた青年『相田みつを』。当時、作品を足利中に売り歩くもなかなか売れず、彼の作品に対する想いと夢の話を聞いた旅館なか川初代女将の中川光子は、「いいのができたらみんな持っておいで。買ってあげるから。」とやさしく声をかけました。こうしてなか川は、相田みつを先生の初めてのお客さんとなつたのです。



▲中川光子

「みつを…遠慮しないで、ご飯もいつでも食べにおいでよ」



▲一番人気の「相田みつをオススメ御膳」



▲甘露煮の入ったにしんそば。

その後もなか川以外では殆ど作品を買ってもらはず・・・生活に困っていた事情を知った光子がかけた言葉です。

この一言から、相田みつを先生は毎日のようにご飯を食べになか川に来るようになりました。先生が一番好んだ料理は「甘露煮」。今でも「相田みつをオススメ御膳」として先生が好んだ料理をご用意しています。もちろん、一番人気です。

「日本酒は1日1本までだよ」

光子と相田みつを先生との約束。それは、日本酒は、1日1本まで。みつを先生は、今日あった出来事や自分の作品についての熱い想いを語りながら、なか川名物『甘露煮』をつまみ、美味しにお酒を飲んでいたものでした。



▲相田みつを先生

「看板を作ろうかと考えているんだよ！ 旅館なか川のデザインしてみるかい？」

光子のこの言葉でなか川の看板を製作。その後、デザイナーとしての仕事を始め「香雲堂本店」「虎谷」の包装紙などを作る。「へえ～上手なもんだね～。それなら看板だけでなく、次はうちの旅館の各部屋に飾る部屋札や箸袋に、マッチ箱なんかもいいね～。各部屋にちなんだ作品なんかもデザインしなよ！」こうしてなか川は、相田みつを先生の奇妙な字があちこちに存在する旅館になったのです。今でも、先生がデザインした看板やおてもと、マッチ箱など多くの作品がお店で使われています。

観光団体や法事・宴会でもご利用できます

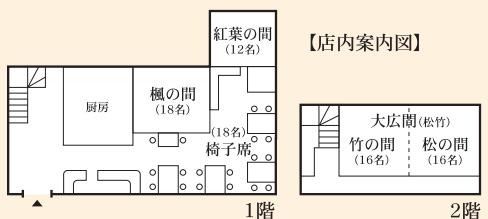


先生のいつもの席がある「紅葉の間」(12名)

「楓の間」(18名)

お祝い事や法事・宴会に人気の
「大広間・松竹」(82名)

「テーブル」(18席)



個人では日本一の相田みつを作品所有。

相田みつをの原点となる初期から中期にかけての作品を中心に100点以上所有し、季節に応じて作品の展示替えを行っております。



「旅館なか川の
看板」
相田みつをが
初めてお店の
デザインを
した作品。



「一生勉強、一生青春」
なか川3代目の妹が
受験生時代に頂いた作品。



「心」
なか川3代目が結婚
したときのお祝いに
頂きました。相田みつを
公式ケータイサイト
でも使われています。

つづきは、なか川公式ケータイサイトへ

相田みつを先生となか川との数多くの物語は、この紙面だけでは、語りつくせません。めん割烹なか川のケータイサイトで続きをお話しします。
なか川公式携帯サイト

<http://katy.jp/nakagawa/>



めん割烹なか川 4代目 中川知彦

『これが最高の楽しみ方です』

天ぬき御膳を食べながら日本酒を飲む。
蕎麦屋文化と最高の日本酒が生み出す
なか川で最も『感動して頂ける』食べ方です。



相田みつをとなか川4代の年表

昭和20年	旅館なか川 創業
昭和20年頃	相田みつを、旅館なか川を訪れ、約50年の交流がはじまる。
昭和27年	相田みつを、光子の孫、泰彦(3代目)、治美、玲子の家庭教師をする。
昭和30年	現相田みつを美術館館長。相田みつを長男の一人誕生。あまりの嬉しさのため、「一人誕生の歌」を書いた二枚屏風をなか川に持ち込む。
昭和34年	初代光子が、相田みつをに1回目のアトリエをプレゼントする。
昭和37年	初代光子が亡くなる。相田みつをが葬儀委員長となる。
昭和41年	「母から意思を継いでいる」と、なか川2代目、彦一郎が、2回目のアトリエをプレゼントする。
昭和47年	三代目泰彦が結婚。結婚のお祝いに「心」という作品をプレゼントされる。
昭和59年	旅館なか川から、めん割烹なか川へ。「ここが私の出発点だから、わたしの一番のお気に入りをもってきた」と「水」という作品を開店祝いで頂く。
平成3年	12月17日、相田みつを、足利市内の病院で永眠。享年67歳。
平成8年	東京銀座に相田みつを美術館が開館。作品の貸し出しを企画展ごとに行う。
平成15年	相田みつを美術館が東京国際フォーラムへ移転。
平成16年	テレビ朝日「にねぎんだもの相田みつを物語」が放送。 めん割烹なか川もその舞台として、主演の木梨憲武さんなどが撮影に訪れる。旅館として物語にも登場。

